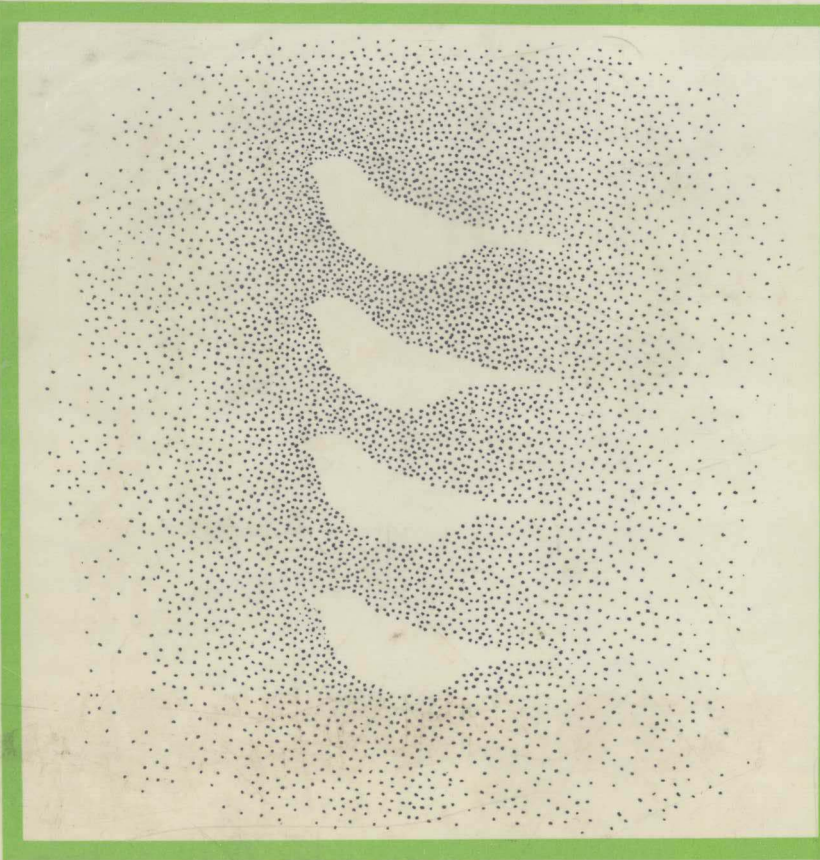


笹舟日記

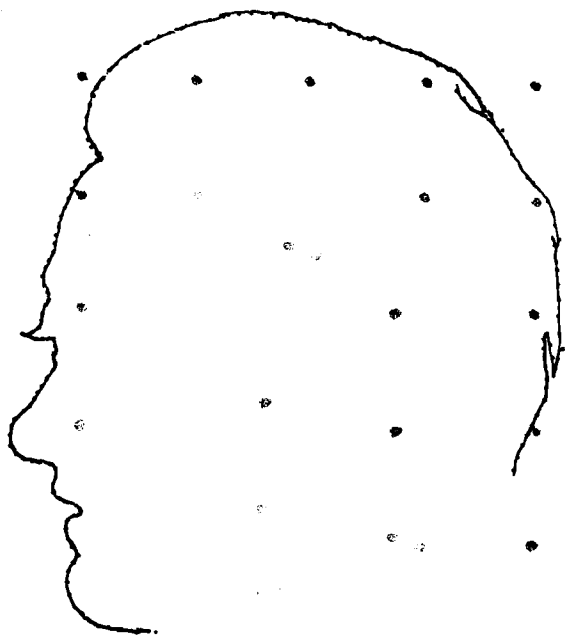
三浦哲郎



毎日新聞社

笹舟日記

三浦哲郎



毎日新聞社

笹舟日記

650 円

昭和四十八年五月二十日 印刷
昭和四十八年五月三十日 発行

著 者 三 浦 哲 郎

編 集 人 浜 田 琉 司

発 行 人 朝 居 正 彦

発 行 所 毎 日 新 聞 社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市北区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 中央精版
製本 佐久間製本

© Tetsuo Miura 1973

0095-500185-7904

笹舟日記・目次

娘と湯の花 9

ゆで卵を食べる日のこと 15

おふくろの消息 21

繭子の像の前で 27

オオムラサキの匂う街 39

お銀さんと夜ふけの道 45

私の木刀綺譚 51

ひとり旅の踊子 57

もういちど逢いたい人 63

栃木県M町のお堂 69

松江で思い出したこと 75

『病気の部屋』にて 81

雨の道すがら 87

磯の香のする遠景 93

サクランボを食べながら 99

夜明けのカナカナ 105

猫背の小指 111

土用の丑の湯 118

二十七年前の凶器 124

網棚に寝そべる男 131

雀の学校の鞭ふり教師 137

帽子の穴の秘密 143

蛇に刺されて 149

ジャスミンと恋文 155

Z旗の旅の思い出 161

姉はイルカにまたがって 167

カンガル―通信 173

耳たぶの秋 196

汁粉に酔うの記 202

コップの底の妻 208

林檎畑の林檎作り 214

玉虫色のドテラの記憶 220

夜のスクーター・ワルツ 226

方言について 232

ひとちがい 238

除夜の鐘まで 244

書き初め・弾き初め 250

私の受験生時代 256

小鳥のくる庭 262

湯宿の拍子木 268

炒り豆を噛みながら 275

座敷わらしの話 281

鰯たちよ 293

夜ふけのメロン 299

留学生・張君のこと 306

三月十六日の記 312

春は夜汽車の窓から 318

あとがき 324

裝
幀

新
本
燦
根

笹
舟
日
記

娘と湯の花

先日、所用で九州の湯布院まで出かけた帰りに、別府へ寄って、温泉の地獄というのの一つ見物してきた。別府には、地獄といわれるところが十何カ所かあって、地獄巡りというコースも出来ているそうだが、私がみてきたのはそのうちの海地獄というのだけである。

別府の人は商売上手とみえて、海地獄一つをみるにも、見物客は大きな売店の建物のなかを否応なしに通らなければならぬような仕組みになっている。海地獄というのは、一見して古い庭園によくあるような円い池だが、この池には勿論、鯉などいなくて、卵がゆだる。池のむこう隅の岩蔭には噴気孔があつて、そこから白い熱気が凄まじい音を立てて噴き上げていた。

私は、池のまわりを一周してから、地獄でゆでた卵を買って、うすべりを敷いた縁台に腰をおろして二個食った。帰りに、売店の出口のところで袋に詰めた湯の花を売っていたので、ついでに一と袋買ってきた。

湯の花を知らない人のためにいえば、これは植物の花ではない。温泉のなかの沈澱物で、湯垢といえど不潔にきこえるが、これが温泉の成分である。別府の湯の花は、いくらか青味を帯びた白色で、

ぼろぼろになった綿屑に似ている。ちいさな塊を指の腹で揉むようにすると、最初はもそもそした感じだが、じきに白粉おしろいのようなすべすべの粉末になる。

効能書を見ると、ちいさな布袋にこの湯の花をひと握み入れて、沸かした風呂へ放り込むと、忽ち別府の温泉が出来上ると書いてある。いろいろな皮膚病のほか、痔や腰痛にも効くと書いてある。ちょっと試してみたい気もするが、私はこの湯の花を自分の持病のために買ってきたのではない。長女のしもやけのために買ってきたのだ。

私の長女は、この四月から中学生になるが、五年生ごろから母親の台所仕事を手伝ったり、日が暮れてから近くのストアへ買物に走ったりするようにになると、秋から冬にかけて手足にひどいしもやけが出来るようになった。毎日、朝晩水仕事をしている妻はなんともないのに、この子にだけは出来る。次女も三女も、結構寒いなかを駆け廻ったり、水遊びをしたりしているのだが、どちらにもしもやけなど一つも出来なくて、長女にだけはどっさり出来る。

よほど皮膚が弱いのだろうか。けれども、長女は下の二人に比べて皮膚病の経験はずっとすくないのだ。しもやけにだけ弱点を露呈する皮膚なのだろうか。そういう皮膚もあるのだろうか。

私は、年中おなじ家に暮らしているのに、長女にそんなしもやけが出来ているのを、随分長いこと知らずにいた。近頃、妻と長女は、私の知らぬまに家庭に起こっているくさぐさの出来事を、二人で相談しながら選り分けて、私に報告しなくても済むことはそのままにして置く方針を取っているらしい。

今年の正月、ある夜ふけに、私が茶の間の掘り炬燵にひとりでぼんやりしていると、宿題を終えた長女が降りてきて炬燵に入り、しばらくすると、不意に小声で、

「痒いよう、痒いよう。」

と悲鳴を上げた。なにがそんなに痒いのかと訊くと、両手のしもやけが痒いのだという。しもやけなら、こっちは先輩だ、診察してやろうというのと、長女は恥ずかしそうに両手の甲を私の前に並べてみせた。私は一と目みて、びっくりして、思わず、

「あ、シミバレだ。」

といった。

東北も北のはずれに近い私の郷里では、しもやけのことを、シミバレといっている。物が凍ることをシミ、というのが、皮膚の一部がシミてぶつくりとへり上るから、シミバレなのだろう。

いまでも、私の郷里は冬の寒さの厳しいところだが、私の子供のころはいまよりもずっと寒くて、冬になると、シミバレのない子供は珍しいほどだった。誰でもシミバレが出来る場所は大体きまっています、頬骨の上のところ、耳、手の甲、指の股、それに、握ると駱駝の瘤のように盛り上るところなどである。

いちど出来たところには、不思議なことに毎年きまっておなじところに出来る。出来れば痒くて痒くて、堪らずに搔くから、すぐ瘡蓋^{かさだた}になる。シミバレの瘡蓋は、寒風を衝いてよく遊ぶ子の、勲章のようなものであった。女の子は耳をやられて、誰も彼も耳朶に瘡蓋のイアリングをつけていた。

子供ばかりではなく、年頃の娘もシミバレには弱かった。郷里にいる私のおふくろなど、若い時分にさんざんシミバレに痛めつけられた跡が、いまでも両頬の頬骨のあたりに、いくつか薄紫の痣のようになつて残っている。

冬の夜、近所にあった本家^{ほんけ}を訪ねて、台所の窓の下を内玄関の方へ廻っていくと、暗闇のなかにぶ

んと湯の花の匂いがしたものであった。台所の流し場に、年若い女中たちが固まって湯の花を融かした鹽のお湯にじっとシミパレの手を漬けている、その湯の花の匂いが、どこからか帯のように外へ流れ出ているのである。

私たち子供は、その娘たちの湯の花の匂いを嗅ぐと、なにやら気恥ずかしくて、首をすくめて笑い合ったものであった。自分たちこそ、あちこちに瘡蓋の黥章をつけているくせに、娘たちがなに哀れで、滑稽なのである。娘たちの湯の花は、つんと硫黄の匂いがした。けれども、私たちは、

「屁臭せ。」

といつて、肩をひょこひょこさせながら笑った。

長女の両手は、駱駝の瘤のあたりから指のなかほどにかけて紫色に地腫れがして、ところどころに痛そうな鱗割れが出来ていた。いつのまにこんなにひどくなったのだろう。

お母さんにみせたのかと訊くと、もうとつくにみせたといった。妻は毎晩、一緒に風呂からあがると、医者から貰ってきたチューブ入りの薬を塗ってやっているらしい。それで、直ってきたのかと訊くと、確かにだんだんよくなっているが、どうも薬の効き方がはかばかしくない、じれったいと長女はいった。

「ニガリを。」

と私は思い出して、われながら唐突にそういった。

「豆腐屋さんが、豆腐を固めるのにニガリという奴を使うだろう。あのニガリだ。」

子供のころに苦労したことは大人になっても忘れないものだ。

「あのニガリを、豆腐屋さんから分けて貰って、シミパレが出来るところによく摩り込むんだよ。ただし、秋になったら、もう手遅れだ。夏の土用の間にせつせと摩り込む。」

おまじないのようなものだが、これできれいに直った人があるのだから、いちど試みるべき療法だろう。私は、自分の日記式の手帖の、土用の入りの日の欄に、

『豆腐屋よりニガリを。晶子のシミパレ絶滅のため』

と書き入れて置いた。けれども、これとて今年の役には立たないのである。

私は、長女を慰めるために、自分の左手の甲に残っているシミパレの跡をみせてやった。百円玉の半分ほどの、火傷の跡のような引き摺りである。

「お父さんたちは、これをテツカリといっていて、こんなテツカリは誰にでも二つや三つはあったものだ。みんな元氣者だったという証拠のようなものだ。」

「テツカリって、どういう意味？」

「円い禿のことだよ。テカリ、テカリと光るから。ほら、こうすると、ここだけ光が滑るだろう。」

私は、自分のテツカリを電灯の方へ傾けてみせた。すると、長女は、

「田舎のお祖母ちゃん頭のてっぺんにも、テツカリがあるね。」

といった。

「あれはテツカリはテツカリでも、あんなところにシミパレが出来たんじゃない。あれは昔、鬘まげを結うとき、いつもあそこの髪だけぎゅっと引っ張ったから、自然にあんなテツカリになった。お祖母ちゃんのテツカリなら、頬っぺたにいくつもあるだろう。」

と私はいった。

別府の海地獄の売店で湯の花をみたとき、私はすぐ、子供のころ本家の台所から流れ出ていた湯の花の匂いを思い出した。長女を、手だけ湯治させることにして、これが一と袋あれば卒業までもつだらう。私はそう思って買ってきたのだ。

長女は、毎朝、両手の駱駝の瘤のところに、薄く繃帯を巻いて学校へいく。夕方、帰ってくれば、湯の花を融かしたお湯に両手を漬ける。夜、寝る前にもそうしている。長女は、卒業式までにはなんとか直したいと、懸命なのだ。卒業式には、せめて繃帯のとれたさっぱりとした手で、卒業証書が貰いたいのだ。

私は、長女から卒業式には校長先生から直接卒業証書を受け取るのだと聞かされたとき、これは卒業生総代だと思って、「ほほう。」といったが、よく聞いてみると、卒業生全員が順ぐりに登壇して証書を受け取るのだということであった。なにはともあれ、人前に出す手が清潔であるのに越したことはない。

ゆうべも、遅く二階の部屋から降りていくと、洗面所で長女が湯の花に両手を漬けて、じっとしていた。長女は、もうすぐ、私が子供のころに哀れんだ娘たちの齢に追いつく。

「その湯の花、なんか匂わないか。」

私がそういつて訊くと、長女は濡れた手をちよつと嗅いでみて、

「匂うわ。キュウリみたいな匂い。」
といった。